10. 自然現象

10－1．時間（季節・1日の区分）

10－1－1．季節

マタ　アン　mata an「冬が来る」。パィカル　paykar「春」。

［三石　M.H.］

10－1－2　時間を表す表現

タント　tanto「今日」

ニサッタ　nisatta「明日」

ニサッタ　クンナ　nisatta kunna「明日の朝」

ヌマン　numan「昨日」

クンネワノ　kunnewano「朝」

トーケシ　tókes「正午」

ヌマン　numan「晩」

チュプ　ラン　マ　イサム　cup ran ma isam「日が沈む」

例文：

タント　ク　コタネン　ク　ホシピ　ナ　tanto ku=kotanen ku=hospi na.「今日、自分の村に帰ります。」

ニサッタ　クンナ　ク　エク　ナ　ハニ　nisatta kunna ku=ek na hani.「明日の朝、来ますよ。」

ピスン　エカシ　ヌマン　エク　したよ。pisun ekasi numan ek sita yo.「浜に住んでいるお爺さんが昨日来たよ。」

クンネワノ　エムコタ　ク　ホプニ　kunnewano emkota ku=hopuni「私は朝早く起きる。」

タネ　トーケシ　アン　クス　イペ　アン　ナ。tane tókes an kusu ipe an na.「昼（正午）になったので、イペアンするべや」

タネ　チュプ　ラン　マ　イサム　クス　ホシッパ　アン　ナ。tane cup ran ma isam kusu hosippa an na.「日が沈んだので、帰ろう。」

オヌマン　アン　チク　ネプ　アン　エ　ヤ？　onuman an cik nep an=e ya？「晩になったら、何を食べようか。」

［三石　M.H.］

10－2．気象・天候・災害

10－2－1．寒さ

メアン　mean「寒い」。コンル　アッ　konru at「(川などに) 氷がはる」(三石川では、川の全面が凍ることはなかった)。シリ　ポプケ　sir popke「暖かい」。

[三石　M.H.]

10－2－2．暑さ

暑いことをシリ　セセク　sir sesek　という。

天気が良いことをシクシピリカ　sikus pirka　という。まるっきり天気でからっとしている(シリ　ピリカ　sir pirka　と同じ)。シクシ　ウェン　sikus wen「天気が悪い」(シリ　ウェン　sir wen　と同じ)。

[三石　M.H.]

10－2－4．風

大風をポロ　レラ　poro rera　という。山から吹いて来る風はヤマセでメナシ　レラ　menas reraという。海から吹いて来る風はアトゥィレラ　atuy rera　とかスムレラ　sum rera　という。台風で壁が落ちたり、屋根がとんだことがある。風速25mくらいで立って歩けないほどだ。まじないに鎌(イヨプペ　iyoppe)をくくりつける。風向きの方に刃を向けておく。そうするとレラ　カムィ　rera kamuy「風の神」が血を出すと言われている。南部衆も同じ事をする。オココクセ　okokokse「危急の声を出す」して眠っている万の神に目を覚ましてくれと頼む。

[森崎幸雄氏]

レラ　アシ　rera as「風が吹く」。レラ　ユプケ　rera yupke「風が強く吹く」。

[三石　M.H.]

10－2－6．霧・雨・雪

霧が多いことをウララ　アッ　urar atという。

ルヤムペ　アシ　ruyampe as「雨が降る」。雨がどしゃぶりのことをルヤンペ　ユプケ　ruyanpe yupke　という。

ウパシ　アシ　upas as「雪が降る」。「ウクラン　ポロ　ウパシ　アシ　ukuran poro upas as だな。」(夕べ、寝ている間にたくさん雪が降ったんだな、ということ)

[三石　M.H.]

10－2－7．雷

雷が鳴ると桑の木やヨモギをいぶす。家に落ちないように嫌な臭いを出すと避けて通るのだ。

[森崎幸雄氏]

アキアジが上ると雷がなり、雷が川下の方からだんだんと上がってきて、農屋の上流の二股の中島の大きな岩の上に来ると鳴りやむ。川下から静かに上がって来ると、ここに来て雷が鳴りやみ、アキアジを連れてきたので、アキアジを捕り始めてよいということになる。マスもつ

いてきたという。カムィ　カムィチェプ　トゥラ　ワ　エク　kamuy kamuy cep tura wa ek「(雷の) 神がサケを連れてきた」という。

雷の神をフムマッキ　カムィ　humumatki kamuy「フムという音を出す神」とか、リクン　フムマッキ　カムィ　rikun humumatki kamuy「天にいるフムという音を出す神」という。雷は、アキアジを連れて、奥高見を越えてイドンナプ　itonnap　岳までも上がっていく。雷鳴は中島（ペトエカリ　pet oekari）で止むが、アキアジはさらに上流へいく。

［森崎幸雄氏］

アキアジは9月の中旬に川に入る。雷は9月10日から20日の間に鳴る。あまり強くは鳴らない。このような雷をカムィ　チェプ　トゥラ　ワ　エク　カムィ　kamuy cep tura wa ek kamuy「サケを連れてきた神」という。イメル　imeru「稲光」の光り方も穏やかである。雷にも普通の神と荒神がある。イドンナプ　itonnap　の山まで鳴り響いて行くのが荒神である。イドンナプは十勝の国との国境に近い山でそこまで悪いものを追いかけて行くのだという。

［森崎幸雄氏］

カムィフム　アシ　kamuy hum as「雷が鳴る」。イメル　アッ　imer at「稲光がする」（稲妻があると、頭にかぶっているものを取る。雷の神様をエアィヌコル　eaynukor（大事にする）して、オリパク　oripak「おそれ慎む」するからだ。）

［三石　M.H.］

10－2－10．洪水・津波

ペッ　カムィ　ウェン　ルィ　ワ　ワクカ　サン　pet kamuy wen ruy wa wakka san.「洪水になる。」（ペッ　カムィ　pet kamuy　とは、三石川のこと）。ペッ　カムィ　ウェン　ルィ　ワ　ペッ　ポロ　pet kamuy wen ruy wa pet poro.「洪水になる。」

［三石　M.H.］

丸木舟は使わなかった。三石川は洪水（ポロ　ペッ　ワクカ　カムィ　poro pet wakka kamuy という）が多かった。畑が大水害になって引越ししたことがある。

［三石 M.H. ］

10－3．天体

10－3－1．太陽の神

病人ができたら、火の神様に頼んでから太陽の神に頼む。

月はクンネ　ツプ　カムィ　kunne cup kamuy、太陽はツプカムィ　cup kamuy　という。男神とも女神とも言わない。

［森崎幸雄氏］

太陽の神を日常語ではチュプカムィ　cup kamuy、またはリコマカムィ　rikoma kamuy　という。祭りの時使う尊称は、ピンネアィハシナゥコロオィナマッ　pinne ay hasnaw kor oyna mat　という。太陽の神は女だが、月は男。月が兄だ。一番尊敬する神が太陽の神。人間がすべ

て恩恵を受けているから。太陽に旦那がいる話は聞いたことはない。

［葛野辰次郎氏］

10－4．地理・地形

10－4－2．地形名称

川の流れている部分をペッ　petという。川原（ピタラパ　pitarpa）を避けて家が建つ。

［森崎幸雄氏］

ピゥカ　piwka「河原」（ピゥカ　カ　タ　piwka ka ta「河原の上で」）

［三石　M.H.］

ペトエカリ　petoekari　とペテカリ petekari　は違うところだ。農屋の奥のペトエカリ（「ふた川」）は川が穏やかに出会うところで、ペテカリは、山の荒いところにあり、川が激しく出会う（コイカクシシベチャリとコイポクシシベチャリの落合い―編者）

［森崎幸雄氏］

10－4－3．方向名称

「ピシタ　pista　行ってくるからな」「エピスン　episun　行ってくるからな」というのは、「浜さ行く」という意味だ。エピスン　ク　サン　ワ　ク　エク　ナ　ハニ　episun ku=san wa ku=ek na hani　と言う。イルカ　エピスン　ク　サン　ワ　ク　エク　ナ　ハニ　iruka episun ku=san wa ku=ek na hani.「ちょこり浜さ行ってくるからね。」

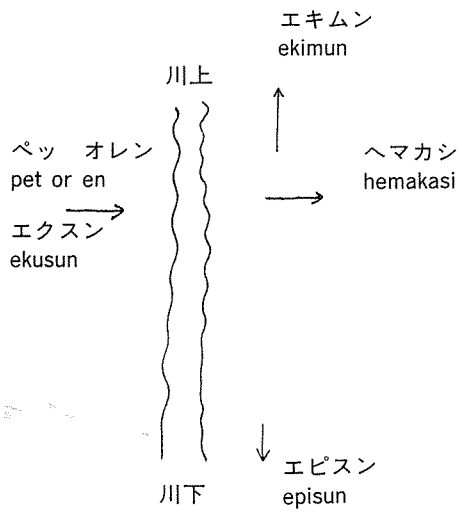
エキムン　ク　オマン　ワ　ク　サン　ナ　ハニ　ekimun ku=oman wa ku=san na hani.「山に行ってくるからね。」

ヘマカシ　ク　オマン　ワ　ク　エク　ナ　ハニ　hemakasi ku=oman wa ku=ek na hani「裏山に行ってくるからね。」

ペッ　オレン　ク　オマン　ワ　ク　エク　ナ　ハニ　pet or en ku=oman wa ku=ek na hani.「川に行ってくるからね。」

エクスン　ク　オマン　ワ　ク　サン　ナ　ハニ　ekusun ku=oman wa ku=san na hani.「川向うに行ってくるからな。」

図18　方向名称



［森崎幸雄氏］

10－4－4．地理・地名

カツオ岩というのがある。舟を操るのが下手で遭難したのでその名がついた。

［森崎幸雄氏］

国境（稜線）近くにもサマッキ　samatki「横山」があり、コタン　kotan　が一つあった。

［森崎幸雄氏］

イタオラキ　itaoraki　と言うところに小さな川があり、七つ滝がある。クマの通り道。ペトエガリ　petoekari　からちょっと上がってスムペッ　sumpet　に入った所だ。

［森崎幸雄氏］

何百年も昔の事、静内ふた川の奥の西の沢（メナシベツ　menaspet　の事か？）まで弁財船が押し上げられた。この場所をイタホラク　itahorak「板がかやる（倒れる）」という。農屋の人から聞いた話だ。

［葛野辰次郎氏］

<u>底無し沼の話</u>

チェプポチ　ceppoci　の手前にあるキナチャ　ヤチ　kinaca yaci　にキナチャ　kinaca「草を刈り」に行ったばあさんがその底無し沼に沈んで出てこなかったが、やがて静内の浦の沢（ウラペッ　urapet）に出たという話がある。

［森崎幸雄氏］

東静内も元は捫別（モンベツ）と言った。

東別（トウベツ）は、昔はこの辺一帯をウェンベツ　wen pet（湿地帯であった）あるいはトイベツ　toy pet　と言った。沢全体をキクシナィ　kikusnay　という。仕事をするのに通る川という意味だ。

［葛野辰次郎氏］

三石川の下流の西側の沢にカニカルナィ　kání kar nay　という名の沢がある。「砂金を採る沢」という意味だ。

［葛野辰次郎氏］

蓬萊山をイマニッ　カムィ　imanit kamuy（イマニッ　imanit　焼き串）と呼ぶ。亡夫は、そこへ御神酒を持ってカムィノミしに行く。そこで祭りもした。山の麓で皆で跳ねたり（踊ったり）、御神酒をあげたりした。蓬萊山の川（三石川）の向いに小さな山があるが、これはイマニッの頭が折れて川を越えて向こう岸に落ちてしまったものだ。

［三石 M.H.］